昭和三十一年に於ける国語学界の展望

――第二部 昭和三十一年度――

芳賀 綏

一

近年、出版界あたりで言われ出した〝ことばブーム〟は、昨三十一年度に、ちょっとしたクライマックスに達したようだ。ブームを最も端的にあらわしたのは、二つの**講座もの**――東京創元社の「ことばの講座」と、大月書店の「講座日本語」で、両講座はほぼ雁行して好成績裡に完結したようだ。

ことばブームと言うが、つきつめるとそれは〝言語生活・言語技術ブーム〟だ――と言ったら、ちょっと言い過ぎになろうが、とにかく〝言語生活・言語技術ブーム〟が、ことばブームの中によほど大きな比重を占めていることはたしかである。文法ブームも国語教育ブームもあるかもしれないが、それらの部門のものは、おおよそ固定した読者を前からつかんでいたのではなかろうか。それに比べて、これまでことばの本などあまり読まなかった一般の人々の関心を向けさせて大いに〝浮動票〟を集めたのは、戦後とみに議論の沸いた国語問題と並んで、というよりそれを上まわって、言語生活・言語技術の問題であった。

現に、二つの講座のうち、東京創元社「ことばの講座」の方は、全六巻のうち、三巻までをこれらの方面にあてている。――中で、第四巻「ことばの生活技術」は、言語技術＝生活技術という立場をタイトルにも明らかにしつつ、学界からと、実際家側からと、まず適所に適材をそろえて筆をふるわせた。第三巻「ことば・話・文章」の方は、それよりは一歩退いて、ことばの生態の記述ということに眼目をおいたようだが、奥のねらいは、技術への基礎、というところにあるらしい。事実、もっぱら手引きの役に廻った文章もある。ここでも実際家の参加が生彩を放った。第五巻「現代社会とことば」は、更に広く、言語生活一般を視野におさめ、社会生活の諸断面にことばとのつながりを求めた。

講座といえば、「NHK国語講座」（宝文館）も出版された。NHK第二放送には同名の番組が昭和三十年春から新設されたが、これはそこで放送されたものを収録したもの。――その第一巻は「ことばの使い方」で、中村通夫・大石初太郎・永野賢・石黒修・平井昌夫各氏の分担。語句の使い方、語句の吟味とことばの誤まり、表現の種々相、慣習とエチケットから、具体的な場面をとりあげては演説・テーブルスピーチ・面接・司会・会議等々のことばづかいにまで及ぶ。第三巻「話の進め方」は、森岡健二・宇野義方・上甲幹一・大久保忠利・水原泰介氏等の担当で、話の心がまえや話の組立て方、目的に応じた話し方等から、会議・討

議の要訣などを説き、最後に、各実際面のベテランとのインタビューをも収めた。――なお同講座は順次新しいテーマと担当者で三十一、二年度とひきつづき放送されている。

二

単行本では、光風出版「話しコトバ新書」全六冊が時宜に適った企てと言ってよく、これまで雑誌や講座類に短いもの・断片的なものがのることは多くても、一冊のまとまったものの少なかったこの方面にも、ようやくこういうものが出て、理論的な掘り下げや体系づけにふれられるようになったのは喜ばしい。三十年度に出た平井昌夫氏の「話しコトバの機能」「……実用」につづいて、金田一春彦「……技術」・大石初太郎「……性格」・森岡健二「……効果」・上甲幹一「……練習」という内容。――そのうちで、金田一氏の「話しコトバの技術」が三十一年度に出た。本誌第九輯の「入門講座・言語技術」以来、氏による言語技術体系化の試みは待たれていたところ。体系づけの意図は著者の言にも明らかである。

ほかには、先に「言葉の使い方」で〝ことばブーム〟に先鞭をつけた一人、田代晃二氏が、今度は「声の使い方」（東京創元社）。分析にはなお不十分なところを残すが、パロールの音声学といった方面に類書が少いだけに、これもまず適時打。この方面に、まとまった良書のつづくことが待たれる。言語技術というと、平井昌夫・大久保忠利両氏の名は逸せられないが、この年度、平井氏には「上手な話し方――ことばの研究室――」（講談社）、大久保氏には「コトバづかいの心理――あなたは思う通りに話せるか――」（六月社）があった。

田中巌「座談・挨拶・講演の心得」（ダイヤモンド社）、山名正太郎「売込む話術」（六月社）等はなかなかおもしろく、考えさせる材料を多く提供するが、今日、よせ集めでない一本スジの通ったもの、理論的にととのったものが求められる段階では、ちょっと時節おくれの感じがさけられない。とはいっても、セールスマン・芸能人関係のもの以来の、この種の、比較的ナマのデータを豊富に提供する書物は、今後も大いに出てもらっていい。学的処理はそちらとは分業でやればよいのであろうから。――自由国民社お得意の「現代生活のバイブル」ことばの巻も、いろいろと装いを新たにして「話術・作法・文章――一九五六年合冊版」を出した。

外国のものでは、A・シーグフリード「現代弁論術」（河盛好蔵・河野与一訳、岩波新書）が一読されてよい。また、かつて大久保忠利氏によって、ハヤカワの一般意味論書（「思考と行動における言語」）が紹介されたが、この年度初頭、A・J・リー「生活と言語――一般意味論序説――」（池上保太・片山嘉雄訳、研究社）が出た。一般意味論については、アメリカでも賛否の議論がかまびすしい様子であるが、日本でも、もっと多くの人々によって、積極的な吸収なり批判なりが行われてよいであろう。

マス・コミュニケーションに関する分野では、国立国語研究所・日本新聞協会共編の「高校生と新聞」「青年とマス・コミュニケーション」（秀英出版）がある。E・S・ボガーダス「世論の構造」（山本文雄訳、洋々社）など、社会学の側からの言説に学ぶべき点も少なくない。吉田洋一・西平重喜「世論調査」（岩波新

書）は、ランダム・サンプリングについての平易な解説で、国語研究所の敬語の調査にもふれている。――なお、未見であるが、「広告の研究」30年版・31年版（電通）・「民間放送用語参考資料」㈠㈡（民放連放送用語研究会）がある。事典の類には、清水晶・原田俊夫・宇野政雄編「広告事典」（同文館）があった。

文章関係では、瀬沼茂樹「文章作法」（河出新書）をあげる。同書の「現代文章作法」の部分は、かつて「知性」連載のもので、やや断片的ではあるが新鮮な見解をふくみ、啓蒙の効があったと思われる。ほかには、服部嘉香「現代書簡文新講――新定書簡礼法と文例――」（早大出版部）、増田太次郎・泉剣一郎「販売文と広告文」（春秋社）など。

三

こうして、〃ブーム〃も単にかけ声だけというのではなく、一応の内容をそなえたものと見られて来たが、日常卑近なものに目を向け、生活の諸断面に即してことばをみがき、吟味するという行き方が、大方の関心をとらえて、ここに至らしめたことは否めない。その意味で、**雑誌**「言語生活」が、昭和二十六年創刊以来今日まで傾けて来た努力と、それを導いた西尾実氏の見識とは高く評価さるべきであろう。

この年度の同誌は、イタリア（一月）イギリス（二月）中央アジア（四月）ベルギー（五月）マライ（七月）……と各国の言語生活を順次展望。それぞれ野上素一・崎山正毅・岩村忍・グローバース・牛島俊作の各氏が執筆した。一月号の、座談会「言語生活の今と昔」（大岡保三・村岡花子・西尾実・上村幸雄）につづく真下三郎「江戸時代における女性の生活とことば」などの試みは、時枝博士のいわゆる〃言語生活の歴史〃としての国語史の構想〃にも無縁ではあるまい。八月号では、座談会「日本人の言語生活にユーモアはあるか」（徳川夢声・田代たつ子・中島健蔵）を先頭に、日本の文学や演芸にあらわれた笑いとユーモアを、塩田良平・松尾聡・小山弘志・成瀬正勝・安藤鶴夫・長沖一の諸氏が解剖した。十二月号の特集は「国語政策十年」で国語問題の分野に属するが、国語研究所所員の座談会「言語改革は何をもたらしたか」は、言語生活の諸側面への影響を探っている。

同誌毎号の「録音器」は、日本語の〃現代風景〃をマメにとらえており、創刊以来の「目・耳」欄は依然おもしろく長距離レースをつづけている。担当者各位の労を謝したい。これらの欄はもとより、「言語生活」の記事には、雑誌の性質上、ナマのデータなり随想なりを学的処理以前の形で示しているものも少なくないけれども、何よりも事実をとらえる目と耳――センスがなくては学問的処理も何もあったものではない。その意味で執筆者・編集者のセンスに教えられるところ大きい記事が少なくない。ただ、随想などの場合、執筆者によっては、単なる素人の思いつきといった、方向のそれた発言に終ることがあったが、近来は手がたいものばかりがそろう傾向にある。

「言語生活」がその名の通り言語生活一般を対象とするのに比べて、やや言語技術に重きをおいたものとして、創刊間もない話術ロータリー機関誌「ことば」がある。「販売話術」（遠藤健一）「放送話術」（高橋邦太郎）「報道話術」（堀川直義）とその道のベテランによる三つの連載講座が並び、あるいは「話術の歴

史」（増田太次郎。五月号から）を説き、「しゃべる愉しさ」（田中千禾夫・菅原卓・山川幸世・西尾実・徳川夢声。二月号）を語り、「話しコトバのあいまいさ」（中村通夫。五月号）をつくなど、多彩であったが、三十一年度は八・九号までで休刊。

連載講座といえば、大久保忠利「現代生活と言語技術」が、雑誌「実践国語」に、一・二・四・五月と連載された。

放送話術なら「NHK放送文化」がお手のもので、森戸辰男「放送と話術」（五月号）、沢村貞子「マイクは恐い」（八月号）、藤倉修一「アナウンスABC」（八月号）など。なお五月号には井口虎一郎「放送文章について」があり、七月号の座談会「ことばの生態」は、池島信平・石黒修・大久保忠利・曾野綾子・後藤美也と顔ぶれをそろえた。――新聞文章の分野には「新聞研究」各号があり、「電通広告論誌」六号は「広告の傾向」を特集してテレビ・ラジオ・新聞・雑誌にわたった。

「思想」五月号には、大淵和夫「むずかしい言葉をいかに説明するか」があり、コミュニケーションの問題について着実な研究成果を世に問いつつある加藤秀俊氏も「新聞と意味論――戦後日本のキイ・シムボルの歴史的変化」を書いている。

文章・文体にかけては、「文学界」八月号が、河上・平野・青野・亀井・伊藤・小島・野間・椎名・平林・井伏・三島・石原・丹羽と並べて断然にぎやか。「国語国文」は十一月号が「表現と文体」特集で、森重敏・阪倉篤義・渡辺実・橋本四郎・亀井雅司川端善明・伊吹武彦氏等の論考をおさめた。その中で、宮地裕氏は、「問答有用」と「やアこんにちは」を拉し来って「対談の文体論的考察試論」をものしている。

四

このように眺めると、言語生活・言語技術の名は新しく、また問題や方法も次々と新しくなっては行くが、一面、久しい以前から問題になっていて長らく解決を見ないでいる事柄が再び三たびとりあげられているということもあるようだ。戦前からの〝標準語教育〟と相おおうような問題も中にはある。さかのぼれば、松下大三郎博士の文典の中には、しばしば日本人の言語生活についての卓見が述べられており、また、かつての話し言葉研究の唱導者・神保格教授の「話し言葉の研究と実際」等には、今日なお必ず立ちかえって学ばれるべきものがある。古くからの修辞学・美辞学等につながる問題が装いを新たにとりあげられて来る場合もある。――本誌の展望が、今度はじめて「言語生活」に紙面をさいたことでも知れるように、この領域がいわばニュー・フェイスであることはたしかだが、横たわる問題は必ずしも新しずくめではない。

しかるに、「言語生活」の分野の研究を国語学の一部門と見なすか否かについては、諸家の間でなお見解が一定しないようである。たとえば、言語過程説の首唱者・時枝誠記博士にあっては、それは国語学の主要な研究対象と認められている。それは、かつての「国語規範論の構想」（昭二二、文学）をはじめ、「国語史研究の一構想」（昭二四、国語と国文学）を経て、最近の「国語学原論・続篇」「現代の国語学」、更に「国語学辞典」の中「言語生活」の項（博士執筆）等によっても明らかに知られるところである。が、過程説の同調者の立場が、この問題についても全同で

あるかはつまびらかでない。また、時枝博士によれば、言語生活を対象とする研究は非過程説側にはなかった、とされるが、それは必ずしも過程説の専売とは言えない。（この議論は、言語を過程ないし活動としてとらえることが〃言語過程説〃の専売か否かについての見解の相違に帰するようだ）。バイイの「言語活動と生活」のごときは、果してソシュールの〃パロールの言語学〃の意図にかなったものか疑わしいけれども、それはさておき、日本で、ソシューリアンと称される人々の間にも、この分野についての研究成果が生まれつつあることは事実である。といって、これまたソシューリアンならすべて見解を同じくするというわけではないし、更に広く〃非過程説〃（と、仮に一括するとして）論者全般となれば立場はいっそうさまざまに別れよう。

要するに、「言語生活」「言語技術」の概念規定において、すでに各人の間に異同があり、それが各人の言語観ないし言語学観と各様に交錯して、立場が判然と別れるまでに至っていないというところであろう。

ところで、「言語技術」については、技術はともすると魔術と同じ側に立つのではないか、という疑いがある。それについては、「技術」はイデオロギーから中立のものであって、技術そのものにはよいも悪いもない、というのが、〃言語技術学者〃にほぼ共通した基本的な見解になっているようだ。そして、その見解に誤まりはない、その通りだと思われる。ただし、ことばは、ことばを通じての社会生活の実践につらなっており、いわゆる人間関係（ヒューマンリレーション）に即して言語の機能が問題とされるのである。とすれば、やはり何らかの意味において、ことばの背後にある人間観や社会観との関連が論じられる必要も出て来よう。たとえば、「一般意味論」に対しては、一般意味論は言語の適正な使用によって個人間・国際間のいざこざを緩和しようとするが、いざこざの真の原因である社会的矛盾には目をふさいでいる、との批判が出ている由。かような問題はおのずから論外であるとしてしりぞけられるのか、あるいは何らかの解答が用意されるのか。――古くはギリシャとローマの修辞学も思想と修辞との関係をめぐって主張を異にしたが、今日また、この種の疑問や批判に対して、〃技術学〃側に更につっ込んだ解決の用意があってよいのではなかろうか。

かくて、かれこれ考え併せるとき、「言語生活」あるいは「言語技術」の研究が、その学的秩序をととのえるべき時期はそろそろ来ているのではないか。問題の発見は相次いでおり、また体系づけの試みはすでに見た通りであるが、対象の画定・方法の検討等、一段の整備が進められ、この学の効用とその限界もまた明らかにされるべきであろう。

この種の研究に対して、賛否の論はよいとして、中には、つまらぬ誤解や、あるいは半解ぐらいにもとづく批判もあるやに聞く。あるいは、誤解を招きやすい発言が〃言語生活（技術）学者〃側にもあったのであろうか。――ともあれ、さまざまの角度からする検討や反省を経て、あるべき言語生活（技術）学の姿を見出すべきときであろう。ブームにまかせて根本の地固めが忘れられてはなるまい。そのような意味からも、本年の「言語生活」五・六月号と連載された森岡健二氏の「ことばの技術の再吟味」など、本展望と併せ読まれることをおすすめしたい一文である。

なお、「国語学辞典」の、「言語生活」「言語技術」以下の関係項目について、各執筆者の観点の異同などを知られることも便利であろう。

――東洋大学講師――